

少子高齢化時代におけるキャリアデザインと人権教育

シニアの実態調査から学ぶ人権教育の新たな視点

Career Design and Human-rights Education in the Era of Declining Birthrates and an Aging Population - The Fresh Perspective on Human-right Education learned through the Field Study of Seniors -

太田仁・阿部晋吾

OTA Jin, ABE Shingo

This study was driven by the awareness of the problem that the mutual understanding between seniors and children who are responsible for the next generation should be promoted from the structured perspective of human-rights education in the society where a population is aging at speeds without parallel in the world. By reviewing the current situation of human-rights education, it was found that the understanding of active seniors is missing from the learning contents regarding seniors at school. This paper reports the summary of the findings from the study of 537 seniors between 58 and 100 years of age (229 male and 308 female; average age: 71.6) to obtain the basic data necessary to promote the multidimensional understanding of active seniors. It was suggested that the respondents of this survey were very active since they maintained the long term of employment which resulted in less economic instability. Meanwhile, the result from the study of giving and receiving of help showed the effect of traditional gender role. The rating of sexual behavior of seniors was low due to the small number of question items.

Keywords: Human-rights Education, Active Seniors, Career Design

はじめに

世界人権宣言（1948 年第3回国連総会で採択）第2条では、「すべて人は、人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治上その他の意見、国民的若しくは社会的出身、財産、門地その他の地位又はこれに類するいかなる事由による差別をも受けることなく、この宣言に掲げるすべての権利と自由とを享有することができる」と示されおり、日本国憲法においても、「国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない」こと、「国民は個人として尊重され、生命、自由及び幸福追求権は最大限尊重される」こと、「国民は法の下に平等であり、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により差別されない」ことなどが示されている。

人権意識は意図的、系統的、継続的に教育指導することでしか獲得することは難しく、そのためには、学校を始め、家庭、地域における啓蒙教育活動が必要であると共に、被差別者の窮地を理解する取り組みが不可欠である。

差別問題は、「身分差別」特定の居住地区に対する「部落差別」「家柄差別」プロレタリアート、フリーター、ニート、路上生活者、収入による差別、勝ち組・負け組などの階級と職業に関するラベリングによる差別階級差別、学歴（学習歴ではなく学校歴）差別、職業差別、性風俗産業に対する差別、人種・民族・文化に関する差別、衣食住の風俗文化に関する差別、国籍差別、性に関する差別、性差別、男性差別、LGBT などの

性的少数者への差別,障害者差別,貧困者差別,低所得層への差別,老人差別,病人差別,被災者に対する差別など多様な場面で多様な形で生起する。

わが国の差別事象については、法務局・地方法務局(平成 27 年,2015)は人権侵犯事件件数は減少しているものの被害者は多くが女性,児童,高齢者,障害者であることを報告している。

学校における人権教育

人権教育に法的根拠

人権とは「人々が生存と自由を確保し,それぞれの幸福を追求する権利」「人間の尊厳に基づいて各人が持っている固有の権利であり,社会を構成する全ての人々が個人としての生存と自由を確保し社会において幸福な生活を営むために欠かすことのできない権利」(人権擁護推進審議会答申,平成 11 年(2009))とされている。

これを踏まえて,人権教育とは,「人権尊重の精神の涵養を目的とする教育活動」(人権教育及び人権啓発の推進に関する法律(平成 12 年法律第 147 号=「人権教育・啓発推進法」)(第 2 条))を指す。人権教育は,世界的規模で実現されるべきものとしてこれまで国際連合では,Table1 の示す経年の取り組みを行っている。

Table1 < 国連による人権教育の主な取り組み >

1993	世界人権会議 ウィーン宣言及び行動計画
1995~2004	人権教育のための国連 10 年
2005~2009	人権教育のための世界プログラム 第 1 段階 重点領域「初等・中等教育」,
2005~2014	国連持続可能な開発のための教育(ESD)の 10 年
2008~2009	人権学習の国際年(2008 年 12 月 10 日から 1 年間)
2010~2014	人権教育のための世界プログラム 第 2 段階 重点領域「教員・教育者,公務員,法執行官,軍関係者」
2011	人権教育および研修に関する国連宣言
2015~2019	人権教育のための世界プログラム 第 3 段階 ・初等・中等教育,高等教育における人権教育」 ・「教員・教育者,公務員,法執行官,軍関係者への研修」 ・「メディア専門職とジャーナリストへの研修」

「人権教育のための世界計画(United Nations World Programme for Human Rights Education)」行動計画では,人権教育について「知識の共有,技術の伝達,及び態度の形成を通じ,人権という普遍的文化を構築するために行う」ものとし,その要素として(a)知識及び技術一人権及び人権保護の仕組みを学び,日常生活で用いる技術を身に付けること,(b)価値,姿勢及び行動一人権を発展させ,人権擁護の姿勢及び行動を強化すること,(c)行動一人権を保護し促進する行動をとることが含まれることを要件としている。

以上から,人権教育の目的を達成には,人権に関する知的理解と人権感覚の涵養を基盤として,意識,態度,実践的な行動力など様々な資質や能力を育成し,発展させることを目指す総合的な教育であることがわかる。

人権教育の構造

このような人権教育を通じて培われるべき資質・能力については,1. 知識的側面,2. 価値的・態度的側面及び3. 技能的側面から捉えることが求められているといえよう。

1. 知識的側面;知識的側面の資質・能力は,人権に関する知的理解を促す取り組みの必要を示している。人権教育により身に付けるべき知識は,自他の人権を尊重したり人権問題を解決したりする上でその判断基準ともなるものであることから公平かつ客観な立場により収集された情報でなければならない。

特に統計等で示される数字は,集約されたものであり個々の状況や生活文脈,文化差などは反映されないことが多いことを念頭においた取り扱いが求められよう。

これらの情報が単に知識として定着することを目標として教育するのではなく自他の人権を擁護し人権侵害を予防したり解決したりする具体的かつ実践への適用が目標とされなければならない。

2. 価値的・態度的側面;人間の尊厳の尊重,自他の人権の尊重,多様性に対する肯定的評価,責任感,正義や自由の実現は人類普遍の価値であり対人態度の不可欠な要素である。

人権に関する知識や人権擁護に必要な具体的行動を発現する基盤となるこれらの価値や態度の育成は,特定の人権教育の授業等に限らず日々の生活の中で学校内外の環境がこうした価値や態度が育成されるよう整備・点検されている必要がある。

3. 技能的側面;人権に関わる知識と態度が実践されるには行動との対応について実体験を通じて個々が内的な検証とその呼応性を確認する必要がある。

人権擁護の観点から目前の事象を既存の知識と対照されるだけでなく,被差別の立場に置かれる人の視点を取得して共感的に受けとめ,それを内面化することが求められる。そのような受容や内面化のためには,様々な技能の助けが必要である。

人権教育が育成を目指す技能には,コミュニケーション技能,合理的・分析的に思考する技能や偏見や差別を見きわめる技能,その他相違を認めて受容できるための諸技能,協力的・建設的に問題解決に取り組む技能,責任を負う技能などが獲得されて反差別の行動が実行できる。

少子高齢化社会の日本における高齢者理解と人権教育

世界に類を見ない速度で進む高齢化社会において,次世代を担う子どもたちと高齢者の相互理解は,先にも示した人権侵害の最も多い被害者であることも踏まえて先に示した人権教育の構造化された視点から人権教育が進められなければならない。

1992年10月の国連総会において,1999年を国際高齢者年とする決議に呼応して日本では,平成18年(2006年)4月に,「高齢者虐待の防止,高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」が施行された。この法律では家族や親族等の養護者や養介護施設職員等による高齢者虐待の防止だけでなく,養護者に対する相談や指導及び助言等の支援が規定されている。他の差別と比べると高齢者差別については,世界でも例を見ない急速な高齢化社会となった日本においては,高齢者に対する人権の擁護について啓蒙が遅れている感が否めない。

高齢者は,かつては自立して職場や家庭,地域で主体的な役割を担いその責任を遂行し,現代社会発展の礎を築いてきた人たちである。高齢者自身も,自らが被差別の立場に置かれるといった自認も低く,またその家族についても自身の親の社会的能力の低下について気づくことが遅れることも少なくない実態がある。

高齢者は身体能力の低下や認知機能の低下,判断力の低下等々から人権が侵害されやすい傾向にあり,認知症高齢者など,いちじるしく脳の機能が低下している人は,ものごとを判断する能力が低下している

ため、より人権問題に巻き込まれやすいと言える。この実態について正しく理解し、啓蒙に努めるためにも学校教育においても高齢者の社会的行動について正しく学ぶ機会が必要である。

これまでの学校教育や家庭、地域での人権に関する啓蒙教育活動については、子どもの権利条約の学習や性差別撤廃と現存する性差別についての学習、部落、人種、障害者差別、LGBT 差別などのテーマと同様に高齢者差別を防ぐために高齢者理解のための授業が人権教育の一環として総合的な学習の時間に様々な方法で行われている(Table2 参照)。

Table 2 総合学習における高齢者理解のための主なテーマと内容

授業テーマ	主な指導内容
I) 高齢者との交流学习	
高齢者理解	高齢者理解のための交流体験。
高齢者ボランティア体験	老人ホーム訪問体験
II) 高齢者支援体験	
老化体験	老化による身体状況の変化（体の自由が利かなくなっていくこと）の疑似体験。
老化に起因する病気体験	脳梗塞などから起きる身体のマヒや白内障を疑似体験
III) 高齢者の理解のための講義	
高齢者介護の学習	「介護する側・される側」の双方を体験し介護される側の不安や不便さを学ぶ
独居老人の理解	一人暮らしの方を訪問する方法を学ぶ
高齢者の身体能力の衰退理解	体が不自由になっていく高齢者についての講義
高齢者施策の現状	高齢化社会の現状理解と支援水準の現状についての講義

Table2 は、全国の小学校・中学校で主に行われている高齢者理解のための授業テーマとその内容である。上記からその内容は、I) 高齢者との交流学习 II) 高齢者支援体験 III) 高齢者の理解のための講義の3つに大きく分けることができよう。この中でI) については、就学前から交流が進められ核家族化における身近な高齢者の不在による高齢者との触れ合いの機会減少を補完し、円滑な高齢者理解と交流を進める機会の増大と高齢者の向社会的性の促進に効果が認められている（cf 村山,2009）。II) 高齢者支援体験 III) 高齢者理解については、日常で高齢者との交流経験の少ない児童生徒に対して、高齢者の身体的特徴や心理社会的特性について認知的な理解を進めることにより、高齢者との交流や支援に対して親和性と肯定的態度を形成しようとするものである。

これらの取り組みの多くは総合的な学習の時間を通じて人権意識を高めるために行われているが、社会的弱者として的高齢者像に即して展開が主流であるように思われる。

高齢者の社会的行動に関する政府のとりまとめでも(ex 高齢者白書(平成28年)など)特にアクティブシニアと呼ばれる人たちについては加齢とともに、その身体機能や認知機能が低下するといわれるが、身体機能や認知機能に若干の衰えがあったとしても、逆に向上する能力もあるとの指摘もある(鈴木ら,2006)。認知能力については、その加齢による変化について、短期記憶能力は50歳を境に急激に衰える一方日常問題解決能力や言語能力は経験や知識の習得に伴ってむしろ向上するとの研究成果(Cornelius SW, Caspi A.,1987)があり身体機能についても1992年時点での高齢者の歩行速度に比べて2002年の高齢者

の歩行速度は速くなっており男女とも 11 歳若返っているとの研究成果(鈴木ら,2006)がある。

また,2030年時点では約8割の高齢者は介護不要で自立的に暮らしているという予測もなされている(総務省「ICT 超高齢社会構想会議報告書,平成 24 年(2012)」)。

このように,高齢者(65 歳以上)を「身体機能や認知機能が低下する社会的弱者」として想定した高齢者理解は適切ではなく,多様な状況と個人によるライフスタイルの実態を学ぶ必要がある。特に,今後の活力ある超高齢社会を次世代の児童生徒がイメージするためにも,身体能力の衰えをカバーする多くの領域における成熟度の高さや多面的な熟慮性,スキルを豊富に有する「アクティブシニア」の実態を学ぶことは,将来高齢期を迎える子どもたちにとっても可能な限り長く自立して暮らし,年齢を問わず,その知恵や経験を活かして積極的に参加できる社会の形成に寄与する態度の形成こそ人権教育における高齢者理解の要点となろう。

高齢者の実態把握の妥当性の検証

具体的に高齢化社会の現状をみると日本の 65 歳以上の高齢者人口は 3384 万人(平成 27 年 9 月 15 日現在推計)で,総人口に占める割合は 26.7%となり人口,割合共に過去最高となった(総務省,2016)。年齢階級別にみでは,70 歳以上人口は 2415 万人で,75 歳以上人口は 1637 万人となり,80 歳以上人でも 1002 万人,初めて 1000 万人を超えたとされている。「人生第 4 期」(The Fourth Age)と呼ばれる 75 歳以上の人口が「人生第 3 期」(The Third Age) (65-74 歳)の人口を数においてはるかに凌ぐ。また,65 歳以上の高齢者人口の半数近くが独り暮らしになると予測されている。80 歳,90 歳代の一人暮らしが一般的になる。このように,いまだ世界のどの国も経験したことのない超高齢社会が日本に到来する。寿命革命によって我々に与えられた「人生第 4 期」という新たなライフステージを含む人生 90 年を充実して幸せに生きるための指針を示し,それを可能にする生活環境を整備することは 21 世紀に生きる我々の重要な課題であり,学術の果たすべき役割は大きい。

人生 50 年時代と人生 90 年時代の生き方は超高齢社会における我々の課題は大きく分けて 2 つある。一つは 90 年の人生をいかに生きるか,という個人レベルの課題である。人生 50 年時代と人生 90 年時代の生き方はおのずと異なる。人生が倍近く長くなっただけでなく,人生を自ら設計する時代になった。20 歳前後に就職,そして結婚,子どもの誕生と続き,60 歳で退職,といった画一的な人生モデルは社会規範としての力を失いつつある。

多様な人生設計が可能になってきたわけであり,例えば,人生 90 年あれば全く異なる二つのキャリアをもつことも可能で,一つの仕事を終えて,人生半ばで次のキャリアのために学校で勉強しなおすという人生設計もありえる。すべてはその人次第になった分,人生設計のあり方が問われている(鈴木ら,2006)。

ジェロントロジー(老年学・加齢学)の研究では,科学的データの蓄積から理想の生活や人生を実現していくために食生活や運動,知的活動,自己観,人間関係などの生活習慣によって強く影響されることを報告している。これらの生理的・知的・社会的態度は,一朝一夕に形成できるものでなく,その態度の維持・構造化については社会的環境との相互作用を無視して実現するものではない。現在,児童期に在る児童生徒の個人が自分らしく最期まで幸福で豊かに暮らしていける可能性を最大化するライフスタイルの選択をライフモデルの正しい理解と交流から学ぶ人権教育が必要である。

本研究は上記の問題意識から,シニア生活実態とその潜在的意識の対応を明らかにし,「援助」「交流」「理解」が相互の救いとなるための人権教育に寄与することを目的とする。

その端緒として,太田・阿部(2016)では,500 名を超えるシニアを対象に実施した調査結果でシニアの援助要請態度の構造と同居家族人数による援助要請態度の差異について検討し,アクティブシニアと呼ば

れる活動的で社会的な高齢者であっても独居である場合は、男女を問わず他者にたすけを求めることが抑制されることを報告している。本論文は、太田・阿部(2016)の報告における調査対象者の属性および各質問項目の記述統計によりシニアの実態把握の端緒としての情報を得ることを目的とした。

【方法】

調査方法および調査対象者 2014年4月～2015年8月に大阪府北部に所在するシニア活動団体4団体の協力を得て、シニア教室等学習会場への来場者および三重県北部の高齢者活動団体への調査協力により1200名に質問紙と返信用封筒を配布し、自宅にて記入後、匿名にて返信を求めた。

シニアのライフスタイル学習会に参加した男女537名(男性229名、女308名、平均年齢71.6歳 標準偏差6.8)の回答を得た。質問紙回収率は44.8%であった。

質問紙の構成

主な属性に関する質問

F1. 性別 F2. あなたの年齢 F3. 同居しているご家族の人数 F4.最終学歴 F5.これまでの勤続年数 F6.現在就労状況 F7.過去の勤めあるいは現在の勤について職業の内容 F8.現在お勤めでない人の就労意向。

心理社会的質問

Q1. 幸福感についての質問 「非常に不幸」0点～「非常に幸福」を10点までで回答。

Q2.自己評価について「1.自分にはいろいろな良い素質があると思う」「2.自分のことを好ましく感じる」2項目

「全くあてはまらない」=1～「非常にあてはまる」=5までで回答。

Q3. 自己愛傾向について尋ねる質問項目小塩 (1998)を参考に各因子3項目を抜粋した9項目「あてはまらない」=1～「非常にあてはまる」=5までで回答。

Q4. 「1.ほとんどの人は基本的に正直である」「2.ほとんどの人は信頼できる」といった項目から成る「他者信頼感」を尋ねる6項目「あてはまらない」=1～「非常にあてはまる」=5までで回答。

Q5. 「1.私は人に何かをしてもらったら、その人にお返しをすべきだと思う」「2.わざわざ人が私を助けてくれた時にはその人に単なるお返し以上のことをしなければならぬと思う」といった5項目から成る他者による援助に対する「負債感」(心理学負担感)を尋ねる5項目「あてはまらない」=1～「あてはまる」=5までで回答。

Q6. 「1.何か困ったときに、人に助けを求めるのは当然のことだ」「2.すぐに人に助けを求めるのは正しいこととはいえない」援助授受に対する「個人の規範」を尋ねる5項目、「6.人に援助を求めることは、恥だ」「7.人に援助を求めることは、自分が弱者であることを認めることだ」といった援助要請に対する汚名感受性を尋ねる5項目 各々「あてはまらない」=1～「あてはまる」=5までで回答。

Q7. ストレスをユーモアでコーピングする程度について楯本・山崎 (2010)を参考に「1.人前でけなされたら、けなされた内容にまつわるエピソード(逸話)をおもしろおかしく話す」「2.自分のみっともないところを人に見られたら、笑ってすませる」といった5項目について「あてはまらない」=1～「あてはまる」=5までで回答。

Q8. 「3.独りで外出した時、迷ったり、気分が悪くなったときは近くにいる人に援助を求める」「7.相手との親密性を知るために些細なことの援助を頼む」といった項目によりシニアの「援助要請行動」を尋ねる10項目 各々「全く行わない」=1～「いつも行う」=5までで回答。

Q9. 「2.日用品の買い物をする」「3.自分で食事の用意をする」といった古谷野亘ら、(1987) 手段的日常生活動作能力検査 (Instrumental ADL; IADL) の質問項目と「17.近隣の人とあいさつを交わす」「18.自分に助けが必要な理由を説明する」といった同様の文脈における援助授受に関する質問項目を加えた 20 項目各々「全く行わない」= 1～「いつも行う」= 5 までで回答。

Q10. 服装やお化粧について、「1.外出用の服に着替える」「2.整髪料や基礎化粧品をつける」「3.オーデコロンや香水・口紅をつける」といった質問項目について「全く行わない」= 1～「いつも行う」= 5 で回答。

Q11. 「1.生活費のこと」「2.健康・身体のこと」「3.介護のこと」「4.財産管理に関すること」「5.災害時の避難のこと」について日常不安に思っていることについて「心配ない」= 1～「とても心配」= 5 で回答。

Q12. 「1.手をつないだり,腕を組んだりする」「2.抱き合う」「3.キスをする」といったパートナーとの日常の性行動について尋ねる 3 項目「しない」= 1～「週 3 度以上」= 5 で回答。

【結果と考察】

調査対象者の属性について (Table3～Table8 参照)

Table3 調査対象者の年齢分布

年齢層		性別		合計
		男性	女性	
年齢 プレオールド 58歳-64歳	度数	23	45	68
	年齢 %	33.80%	66.20%	100.00%
	性別 %	10.00%	14.60%	12.60%
	総和 %	4.30%	8.30%	12.60%
ヤングオールド 65歳-74歳	度数	141	172	313
	年齢 %	45.00%	55.00%	100.00%
	性別 %	61.00%	55.70%	58.00%
	総和 %	26.10%	31.90%	58.00%
ミドルオールド 75歳-84歳	度数	55	77	132
	年齢 %	41.70%	58.30%	100.00%
	性別 %	23.80%	24.90%	24.40%
	総和 %	10.20%	14.30%	24.40%
オールドオールド 85歳-100歳	度数	12	15	27
	年齢 %	44.40%	55.60%	100.00%
	性別 %	5.20%	4.90%	5.00%
	総和 %	2.20%	2.80%	5.00%
合計	度数	231	309	540
	年齢 %	42.80%	57.20%	100.00%

Table 4 学歴

学歴		性別		合計
		男性	女性	
中学	度数	16	71	87
	学歴 の %	18.4%	81.6%	100.0%
	性別 の %	7.0%	23.2%	16.3%
高校	度数	131	142	273
	学歴 の %	48.0%	52.0%	100.0%
	性別 の %	57.2%	46.4%	51.0%
短大・専門	度数	8	17	25
	学歴 の %	32.0%	68.0%	100.0%
	性別 の %	3.5%	5.6%	4.7%
大学	度数	34	28	62
	学歴 の %	54.8%	45.2%	100.0%
	性別 の %	14.8%	9.2%	11.6%
大学院	度数	40	48	88
	学歴 の %	45.5%	54.5%	100.0%
	性別 の %	17.5%	15.7%	16.4%
合計	度数	229	306	535
	学歴 の %	42.8%	57.2%	100.0%

Table5 同居人数

同居人数	性別		合計	
	男性	女性		
独居	度数	16	71	87
	同居人数 %	18.40%	81.60%	100.00%
	性別 %	7.00%	23.20%	16.30%
	総和 %	3.00%	13.30%	16.30%
夫婦	度数	131	142	273
	同居人数 %	48.00%	52.00%	100.00%
	性別 %	57.20%	46.40%	51.00%
	総和 %	24.50%	26.50%	51.00%
自分と子	度数	8	17	25
	同居人数 %	32.00%	68.00%	100.00%
	性別 %	3.50%	5.60%	4.70%
	総和 %	1.50%	3.20%	4.70%
夫婦と子	度数	34	28	62
	同居人数 %	54.80%	45.20%	100.00%
	性別 %	14.80%	9.20%	11.60%
	総和 %	6.40%	5.20%	11.60%
自分と子の家族	度数	40	48	88
	同居人数 %	45.50%	54.50%	100.00%
	性別 %	17.50%	15.70%	16.40%
	総和 %	7.50%	9.00%	16.40%
合計	度数	229	306	535
	同居人数 の	42.80%	57.20%	100.00%

Table 6 過去の職務

過去の職務内容	性別		合計	
	男性	女性		
技能・現業	度数	17	16	33
	過去の職務内容 の %	51.5%	48.5%	100.0%
	性別 の %	7.6%	5.7%	6.5%
営業・販売	度数	19	24	43
	過去の職務内容 の %	44.2%	55.8%	100.0%
	性別 の %	8.5%	8.6%	8.5%
専門・技術 (教職含む)	度数	83	96	179
	過去の職務内容 の %	46.4%	53.6%	100.0%
	性別 の %	37.1%	34.3%	35.5%
管理職	度数	71	15	86
	過去の職務内容 の %	82.6%	17.4%	100.0%
	性別 の %	31.7%	5.4%	17.1%
事務職	度数	24	92	116
	過去の職務内容 の %	20.7%	79.3%	100.0%
	性別 の %	10.7%	32.9%	23.0%
自由・自営業	度数	2	17	19
	過去の職務内容 の %	10.5%	89.5%	100.0%
	性別 の %	.9%	6.1%	3.8%
農林漁業	度数	1	0	1
	過去の職務内容 の %	100.0%	0.0%	100.0%
	性別 の %	.4%	0.0%	.2%
その他	度数	7	20	27
	過去の職務内容 の %	25.9%	74.1%	100.0%
	性別 の %	3.1%	7.1%	5.4%
合計	度数	224	280	504
	過去の職務内容 の %	44.4%	55.6%	100.0%

Table7 過去の就労期間

就労経験	性別		合計	
	男性	女性		
就労経験無し	度数	11	10	21
	就労経験 の %	52.4%	47.6%	100.0%
	性別 の %	4.8%	3.2%	3.9%
5年未満	度数	57	134	191
	就労経験 の %	29.8%	70.2%	100.0%
	性別 の %	24.9%	43.4%	35.5%
10年未満	度数	14	109	123
	就労経験 の %	11.4%	88.6%	100.0%
	性別 の %	6.1%	35.3%	22.9%
20年未満	度数	137	54	191
	就労経験 の %	71.7%	28.3%	100.0%
	性別 の %	59.8%	17.5%	35.5%
30年未満	度数	8	2	10
	就労経験 の %	80.0%	20.0%	100.0%
	性別 の %	3.5%	.6%	1.9%
40年未満	度数	2	0	2
	就労経験 の %	100.0%	0.0%	100.0%
	性別 の %	.9%	0.0%	.4%
合計	度数	229	309	538
	就労経験 の %	42.6%	57.4%	100.0%

Table 8 現在の就労状況

現在の仕事		性別		合計
		男性	女性	
常勤	度数	17	13	30
	現在の仕事の%	56.7%	43.3%	100.0%
	性別の%	7.4%	4.3%	5.7%
非常勤	度数	29	38	67
	現在の仕事の%	43.3%	56.7%	100.0%
	性別の%	12.7%	12.7%	12.7%
無給の職務	度数	62	53	115
	現在の仕事の%	53.9%	46.1%	100.0%
	性別の%	27.1%	17.7%	21.8%
特に無し	度数	121	195	316
	現在の仕事の%	38.3%	61.7%	100.0%
	性別の%	52.8%	65.2%	59.8%
合計	度数	229	299	528
	現在の仕事の%	43.4%	56.6%	100.0%
	性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

以上の調査対象者の属性から,年齢については58歳(最年少)~75歳までで,409名全体の75.8%を占めており,老年医学区分に従うと「前期高齢者(young-old)」に該当する。同居人数については,自分とパートナーだけとした回答が273名(全体の51%)あり,次いでその他を除いては御一人での居住が87名(全体の16%)であった。

また,学歴(短大・専門学校+大学+大学院=324名全体の60%),就労経験は,30年以上と40年以上を合わせると344名(全体の64%)となり職務内容(専門技術職と管理職,事務職合わせて381名全体の76%)などから1950年代後半から1965年頃の高度経済成長の中で青春を迎えた団塊の世代を調査対象としているといえよう。この世代は,「アクティブシニア」と呼ばれ仕事や趣味にも非常に意欲的で生涯現役志向が強いとされている。

シニアの心理社会的傾向

シニアの心理社会的傾向を詳細に理解するため全質問項目の全体の平均・SDとt検定による性差の結果をTable9~Table22に示す。

Table9 幸福感

質問項目	全体			男性			女性			min max	t値	性差
	n	mean	SD	n	mean	SD	n	mean	SD			
どの程度幸福だと感じていますか	535	7.73	1.59	165	1.90	1.267	224	1.88	1.32	1 10	- .529	n.s

幸福感の全体平均は7.73と高く,調査対象者は性別に関係なくアクティブシニアとして人生を肯定的に生きていると言えよう。

Table10 働く意欲

質問項目	全体			男性			女性			min max	t値	性差
	n	mean	SD	n	mean	SD	n	mean	SD			
1.機会があれば生活資金のために働きた	389	1.88	1.29	389	1.88	1.29	389	1.88	1.29	1 5	1.20	n.s
2.機会があれば心身の健康と生きがいのために働きたい	419	2.61	1.54	419	2.61	1.54	419	2.61	1.54	1 5	0.71	n.s

シニアの働く意欲については、生活資金よりも生きがいの方がその動機として高い平均値を示している。このことは、本調査の対象者が高学歴で長期間にわたり正規就労していたことにより生活資金等の不安が少ないことに起因していると推測できる。

Table11 自己評価

質問項目	全体			男性			女性			min max	t値	性差
	n	mean	SD	n	mean	SD	n	mean	SD			
1.自分にはいろいろな良い素質があると思う	537	3.61	0.76	537	3.61	0.76	537	3.61	0.76	1 5	2.26	男性>女性**
2.自分のことを好ましく感じる	528	3.57	0.78	528	3.57	0.78	528	3.57	0.78	1 5	1.97	男性>女性*

**p<.01,*p<.0

Table12 自己愛傾向

質問項目	全体			男性			女性			min max	t値	性差
	n	mean	SD	n	mean	SD	n	mean	SD			
1.私は、周りの人達より、優れた才能を持っていると思う	539	3.14	0.89	539	3.14	0.89	539	3.14	0.89	1 5	2.60	ns
2.私は、みんなの人気者になりたいと思っている	539	2.69	0.95	539	2.69	0.95	539	2.69	0.95	1 5	1.90	ns
3.私は、自己主張が強いほうだと思う	536	2.94	0.98	536	2.94	0.98	536	2.94	0.98	1 5	1.13	ns
4.私は、才能に恵まれた人間であると思う	534	2.80	0.93	534	2.80	0.93	534	2.80	0.93	1 5	2.23	男性>女性**
5.私は、どちらかといえば注目される人間になりたい	534	2.59	0.98	534	2.59	0.98	534	2.59	0.98	1 5	2.74	男性>女性***
6.私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う	536	3.25	1.02	536	3.25	1.02	536	3.25	1.02	1 5	1.06	ns
7.私は、周りの人たちより有能な人間であると思う	531	2.75	0.90	531	2.75	0.90	531	2.75	0.90	1 5	5.53	男性>女性***
8.私は、人々の話題になるような人間になりたい	536	2.46	0.92	536	2.46	0.92	536	2.46	0.92	1 5	4.63	男性>女性***
9.私は、ひかえめな人間とは正反対の人間だと思う	537	2.73	0.96	537	2.73	0.96	537	2.73	0.96	1 5	0.46	ns

***p<.001,**p<.01

自己評価 Table11 自己愛傾向 Table12 では、男性が女性よりも有意に高い得点を示している。

小塩（1998）は、自己愛傾向の特徴である「優越感・有能感」や「自己主張」、「指導力のある」や「自己主張のできる」は伝統的男性性役割と類似していることが一因であるとしており、その指摘と符合する。

女性が男性より低得点であることについても、これらの項目の示す価値観が伝統的女性性役割と齟齬していることが考えられる（Sawrie, Watson & Biderman,1991）と考えられており、女性性はNPIなどに表れる誇大的自己愛とは異質なものであると考えられる。

日本での実証研究においても、自己愛と女性との関連は総じて弱く、特に「自立・主張性」との関連が弱かった（松並・中村,2000；中村・松並,2001）。また、女性のみを対象にした研究においても、誇大的な女性は強い男性性を持ち、依存的な女性は強い女性性をもつ傾向が示されている（Carroll, Corning, Morgan, & Stevens, 1991）これらの指摘と今回の結果は適合するものといえよう。

今回の調査対象者は、1955年以降の行動経済成長とともに人生を歩んできた人たちである。伝統的性役割から解放されて、核家族化が進む中男女関係なく個人の価値を重視する時代を生きた人たちであるが、高齢期にはいつて、再度伝統的性役割を反映した社会的態度へと回帰しているのか潜在的に有していた態度が顕在化したものか検討の余地がある。

Table13 他者信頼感

質問項目	全体			男性			女性			min max	t値	性差
	n	mean	SD	n	mean	SD	n	mean	SD			
1.ほとんどの人は基本的に正直である	538	3.42	0.82	538	3.42	0.82	538	3.42	0.82	1 5	0.32	ns
2.ほとんどの人は信頼できる	538	3.34	0.77	538	3.34	0.77	538	3.34	0.77	1 5	1.32	男性>女性†
3.ほとんどの人は基本的に善良で親切である	535	3.50	0.74	535	3.50	0.74	535	3.50	0.74	1 5	0.63	ns
4.ほとんどの人は他人を信頼している	532	3.20	0.71	532	3.20	0.71	532	3.20	0.71	1 5	1.77	男性>女性†
5.私は、人を信頼するほうである	523	3.77	0.74	523	3.77	0.74	523	3.77	0.74	1 5	-0.31	ns
6.たいていの人は、人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する	541	3.78	0.76	541	3.78	0.76	541	3.78	0.76	1 5	0.37	ns

†p<.1

他者信頼感については、自己評価・自己愛傾向と同様に男性の方が女性よりも高い傾向が認められた。自己評価が高く、自己主張が強い男性が他者への信頼評価についても女性より強い確信を持っていることが推測できる。

Table14 負債感

質問項目	全体			男性			女性			min max	t値	性差
	n	mean	SD	n	mean	SD	n	mean	SD			
1.私は人に何かをしてもらったら、その人にお返しをすべきだと思う	538	4.25	0.71	538	4.25	0.71	538	4.25	0.71	1 5	0.47	ns
2.わざわざ人が私を助けてくれた時には、その人に単なるお返し以上のことをしなければならぬと思う	537	4.01	0.85	537	4.01	0.85	537	4.01	0.85	1 5	0.63	ns
3.人におごってもらうと、次は私がおごらなければならないと思う	537	4.10	0.83	537	4.10	0.83	537	4.10	0.83	1 5	2.02	ns
4.私は人に何か物してもらおうと、お返しのことが気になる	532	4.03	0.82	532	4.03	0.82	532	4.03	0.82	1 5	0.81	男性>女性†
5.私は、友達から世話になったら友情を保つためにできるだけ早くそのお返しをする	538	3.74	0.88	538	3.74	0.88	538	3.74	0.88	1 5	3.37	男性>女性*

*p<.05,†p<.1

Table15 援助規範

質問項目	全体			男性			女性			min max	t値	性差
	n	mean	SD	n	mean	SD	n	mean	SD			
1.何か困ったときに、人に助けを求めるのは当然のことだ	538	3.22	0.95	538	3.22	0.95	538	3.22	0.95	1 5	-1.01	男性<女性†
2.すぐに人に助けを求めるのは正しいこととはいえない	535	3.30	0.85	535	3.30	0.85	535	3.30	0.85	1 5	2.68	男性>女性**
3.自分にとって人に助けを求めることは、ごく自然な行為である	536	2.91	0.91	536	2.91	0.91	536	2.91	0.91	1 5	-0.73	ns
4.なんでも人に助けてもらおうとするのは、よくないことだ	533	3.73	0.93	533	3.73	0.93	533	3.73	0.93	1 5	1.60	男性>女性†
5.困っている人が、人に助けてもらおうとするのは当たり前なことだ	534	3.28	0.88	534	3.28	0.88	534	3.28	0.88	1 5	0.39	ns

**p<.01,†p<.05,‡p<.1

Table16 援助要請忌避

質問項目	全体			男性			女性			min max	t値	性差
	n	mean	SD	n	mean	SD	n	mean	SD			
6.人に援助を求めることは、恥だ	534	2.65	0.94	534	2.65	0.94	534	2.65	0.94	1 5	2.09	男性>女性**
7.人に援助を求めることは、自分が弱者であることを認めることだ	534	2.60	0.91	534	2.60	0.91	534	2.60	0.91	1 5	1.46	男性>女性*
8.人に援助を求めても、自分が必要な援助をしてもらえない	530	2.78	0.82	530	2.78	0.82	530	2.78	0.82	1 5	1.94	ns
9.人に助けを求めても、助けが必要な時に助けてもらえない	530	2.76	0.83	530	2.76	0.83	530	2.76	0.83	1 5	1.58	男性>女性*
10.人に助けを求めると、自分が求めていないことまで世話をやかれる	531	2.80	0.86	531	2.80	0.86	531	2.80	0.86	1 5	0.63	ns

**p<.01,†p<.05

Table14,15,16 は、援助に関する態度を尋ねる項目であるが、これらの項目のいくつかに示された有意な性差にも伝統的性役割期待が潜在的に反映されている。具体的には、Table14 の負債感に援助をされることに対する負担感を示しているが、男性は援助を受けることへの抵抗が女性よりも強い傾向を示しており、このことは伝統的性役割と一致する。

また Table15 では、困った時に人に助けを求める他者依存の態度について女性が男性より肯定的であるのに対して（質問項目1）、男性は否定的である（質問項目2,4）。

より直接的に他者に対する援助を求めることへの抵抗感について尋ねた Table16 では、男性の方が女性より有意に高い抵抗感を示している。

Table17 ユーモアコーピング

質問項目	全体			男性			女性			min max	t値	性差
	n	mean	SD	n	mean	SD	n	mean	SD			
1.人前でけなされたら、けなされた内容にまつわるエピソード(逸)	530	2.21	0.91	530	2.21	0.91	530	2.21	0.91	1 5	-0.86	ns
2.自分のみっともないところを人に見られたら、笑ってすませる	528	2.68	0.90	528	2.68	0.90	528	2.68	0.90	1 5	-0.91	男性<女性†
3.お互いの考えが合わないときは、ユーモアを使って相手と衝突しないようにする	524	3.10	0.91	524	3.10	0.91	524	3.10	0.91	1 5	-3.57	男性<女性*
4.相手にかかわれたら、自分もおもしろがって一緒に笑う	528	2.48	0.93	528	2.48	0.93	528	2.48	0.93	1 5	-2.44	男性<女性**
5.自分の間違いや失敗を人に見られたら、それをネタにして笑いを取ろうとする	530	2.18	0.90	530	2.18	0.90	530	2.18	0.90	1 5	-1.20	男性<女性*

***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.1

Table17 は、ストレスを認知した時の対処方法として選択されるユーモアコーピングについての性差である。結果からは男性よりも女性の方が有意に高い。日本人のユーモアコーピングは、対人関係で生じるストレスを予防・低減することが指摘されており（梶本,2007）シニアにおいても男性よりも女性が関係性について細やかな配慮と実効性のあるスキルを有していることが窺える。

Table18 援助要請行動

質問項目	全体			男性			女性			min max	t値	性差
	n	mean	SD	n	mean	SD	n	mean	SD			
1.食事の準備や掃除洗濯などで自分なりに工夫しても上手くいかないときは、助けを求めよう	532	2.33	1.00	532	2.33	1.00	532	2.33	1.00	1 5	7.01	男性>女性***
2.公的な書類の手続きなど自分でやってみて、どうしても解らないときは、教えてもらおう	530	3.15	0.93	530	3.15	0.93	530	3.15	0.93	1 5	-0.79	n.s
3.独りで外出した時、迷ったり、気分が悪くなったときは近くにいる人に援助を求める	525	2.47	0.89	525	2.47	0.89	525	2.47	0.89	1 5	0.17	n.s
4.身の回りのことは自分ができることでも、誰かにしてもらおう	529	1.57	0.76	529	1.57	0.76	529	1.57	0.76	1 5	7.41	男性>女性***
5.とりたてて用事がなくても、人を呼ぶ	531	1.42	0.64	531	1.42	0.64	531	1.42	0.64	1 5	4.47	男性>女性***
6.人から援助の申し出がなければ、自分から援助を求めない	518	2.19	1.02	518	2.19	1.02	518	2.19	1.02	1 5	3.18	男性>女性**
7.相手との親密性を知るために些細なことの援助を頼む	530	1.75	0.77	530	1.75	0.77	530	1.75	0.77	1 5	2.72	男性>女性†
8.日常あったことなどの話を聞いてもらおう	527	2.82	0.97	527	2.82	0.97	527	2.82	0.97	1 5	-4.70	男性<女性***
9.相手（パートナー・子・孫・友人）を励ます意味で援助を求める	528	2.26	0.89	528	2.26	0.89	528	2.26	0.89	1 5	0.77	n.s

***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.1

Table19 手段的日常生活動作能力検査（12項目+α）

質問項目	全体			男性			女性			min max	t値	性差
	n	mean	SD	n	mean	SD	n	mean	SD			
1.バスや電車を使って独りで外出する(手段的ADL)	532	4.05	1.14	532	4.05	1.14	532	4.05	1.14	1 5	-4.95	男性<女性***
2.日用品の買い物をする(手段的ADL)	534	4.30	0.93	534	4.30	0.93	534	4.30	0.93	1 5	-12.45	男性<女性***
3.自分で食事の用意をする(手段的ADL)	532	4.00	1.28	532	4.00	1.28	532	4.00	1.28	1 5	-21.74	男性<女性***
4.請求書の支払いをする(手段的ADL)	534	4.28	1.05	534	4.28	1.05	534	4.28	1.05	1 5	-14.84	男性<女性***
5.銀行や郵便貯金の出し入れをする(手段的ADL)	534	4.43	0.97	534	4.43	0.97	534	4.43	0.97	1 5	-13.51	男性<女性***
6.年金などの書類を書く(知的的ADL)	530	4.39	0.97	530	4.39	0.97	530	4.39	0.97	1 5	-5.66	男性<女性***
7.高齢者の生活に関する記事や番組に関心をもつ(知的的ADL)	532	3.89	0.98	532	3.89	0.98	532	3.89	0.98	1 5	-7.53	男性<女性***
8.友達や親類(きょうだい・子どもを含む)の家を訪ねる(社会的ADL)	532	3.29	1.08	532	3.29	1.08	532	3.29	1.08	1 5	-8.68	男性<女性***
10.困った時は、友人や家族に限らず人にたすけを求める	529	2.38	0.88	529	2.38	0.88	529	2.38	0.88	1 5	-4.01	男性<女性***
11.周囲の人とトラブルがあったら、関係を修復する	529	2.96	0.92	529	2.96	0.92	529	2.96	0.92	1 5	-2.00	男性<女性*
12.病人を見舞う(社会的ADL)	531	3.34	0.90	531	3.34	0.90	531	3.34	0.90	1 5	-2.28	n.s
13.家族や支援者に自分のきもちを素直に伝える	528	3.30	0.96	528	3.30	0.96	528	3.30	0.96	1 5	-5.05	男性<女性***
14.若い人に自分から話しかける(社会的ADL)	529	3.29	0.98	529	3.29	0.98	529	3.29	0.98	1 5	-5.78	男性<女性***
15.高齢者を対象とした地域の催しへ出かける(知的的ADL+社会的ADL)	531	2.90	1.22	531	2.90	1.22	531	2.90	1.22	1 5	-0.76	n.s
16.役所や病院で担当者に気軽に自分のことを話す	531	3.08	1.15	531	3.08	1.15	531	3.08	1.15	1 5	-0.11	n.s
17.近隣の人とあいさつを交わす	531	4.33	0.74	531	4.33	0.74	531	4.33	0.74	1 5	-5.84	男性<女性***
18.自分に助けが必要な理由を説明する	527	2.54	1.08	527	2.54	1.08	527	2.54	1.08	1 5	-3.08	男性<女性**
19.自分が何を手伝って欲しいか相手に説明する	527	2.62	1.08	527	2.62	1.08	527	2.62	1.08	1 5	-2.67	男性<女性*
20.相手の立場や状況を理解して交流する	534	3.62	0.92	534	3.62	0.92	534	3.62	0.92	1 5	-5.54	男性<女性***

***p<.001, **p<.01, *p<.05

Table18,19 は、シニアの生活特性を反映して自立した生活を営むために必要と思われる援助要請に関する質問項目である。依存的援助要請,自律的援助要請と関係志向的援助要請の 3 因子に分かれている (Table20 参照)おり,関係試行的援助要請では,女性が男性より要請行動をしているが,他の依存,自律援助要請行動については,男性が女性を上回っていた。

他の年代では,男性の援助要請行動は女性よりも抑制されることが指摘されている(太田・阿部 2012)がシニアの援助要請については,高齢者の自律を意図した援助要請が社会的規範に準拠しているといった認知から被援助に対する負債感が軽減されたことによると推測される。

Table20 シニアの援助要請行動因子分析結果

質問項目	依存	自律	関係
	($\alpha=.710$)	($\alpha=.601$)	($\alpha=.583$)
4.身の回りのことは自分でできることでも、誰かにしてもらおう	.819	.038	-.084
5.とりたてて用事がなくても、人を呼ぶ	.700	-.050	.092
2.公的な書類の手続きなど自分でやってみて、どうしても解らないときは、教えてもらう	-.063	.687	.016
3.独りで外出した時、迷ったり、気分が悪くなったときは近くにいる人に援助を求める	-.025	.550	.064
1.食事の準備や掃除洗濯などで自分なりに工夫しても上手くいかないときは、助けてもらう	.188	.466	-.035
8.日常あったことなどの話を聞いてもらう	-.103	.031	.655
9.相手(パートナー・子・孫・友人)を励ます意味で援助を求める	.135	.008	.638

因子抽出法: 主因子法

Table19 は、古谷野直ら（1987）により作成された手段的日常生活動作能力検査であり、日常生活を営む上で、普通におこなっている行為 ADL (Activities of Daily Living) について日常生活の自立度と買い物や洗濯、掃除等の家事全般や、金銭管理や服薬管理、外出して乗り物に乗ること等『手段的日常生活動作』(= IADL (Instrumental Activity of Daily Living)) で趣味のための活動を行う手段に関する動を加えて評価する尺度であり「手段的 ADL」「知的 ADL」「社会的 ADL」

の3側面からその自立度が測定される。今回の調査では、IADL に付随する他者との相互作用を円滑にするための援助授受に関連する項目を加えて回答を求めている。

その結果、「12.病人を見舞う（社会的 ADL）」「15.高齢者を対象とした地域の催しへ出かける（知的 ADL+社会的 ADL）」「16.役所や病院で担当者に気軽に自分のことを話す」といった社会的規範に関連する項目では性差は確認されなかったが、他の 17 項目全てで、女性が男性を上回っていた。

太田・阿部（2016a）では、独居のシニアは、複数の人と暮らす人よりも援助要請が抑制されることが報告されていることからシニアの社会的行動の評定については、規範に沿った道具的な行動と関係性の維持深化を意図する情緒的な行動、さらには新たな関係性の形成を意図する開発的行動などの観点から更なる構造化が求められよう。

Table21 主な悩み

質問項目	全体			男性			女性			min max	t値	性差
	n	mean	SD	n	mean	SD	n	mean	SD			
1.生活費のこと	533	2.41	1.15	533	2.41	1.15	533	2.41	1.15	1 5	1.53	n.s
2.健康・身体のこと	534	3.29	1.12	534	3.29	1.12	534	3.29	1.12	1 5	2.00	n.s
3.介護のこと	532	3.12	1.14	532	3.12	1.14	532	3.12	1.14	1 5	0.15	n.s
4.財産管理に関すること	534	2.62	1.04	534	2.62	1.04	534	2.62	1.04	1 5	-0.31	n.s
5.災害時の避難のこと	532	3.05	1.08	532	3.05	1.08	532	3.05	1.08	1 5	-4.00	男性<女性***
6.子どもや孫の将来	532	3.01	1.21	532	3.01	1.21	532	3.01	1.21	1 5	1.32	n.s

*** $p<.001$

Table21 は、シニアの主な悩みであるが、1.の生活費については、算術的中央値の 2.5 を下回っており他は、平均値よりも高くなっている。今回の調査対象者が高学歴で就労年限も長かったことから生活についての不安は低くなっていることが予測される。一方で健康・身体のことについての悩みは高く次いで介護、災害時となっており現在独居であるシニアと今後独居が予測されるシニアの悩みを反映した結果といえよう。災害時の避難については、男性よりも女性の悩みが高いことから災害時の女性シニアについては、特に不安軽減の必要性を示唆するものといえよう。

Table22 被服行動

質問項目	全体			男性			女性			min max	t値	性差
	n	mean	SD	n	mean	SD	n	mean	SD			
1.外出用の服に着替える	535	3.79	0.46	535	3.79	0.46	535	3.79	0.46	1 4	-7.87	男性<女性***
2.整髪料や基礎化粧品をつける	535	3.43	0.96	535	3.43	0.96	535	3.43	0.96	1 4	-14.52	男性<女性***
3.オーデコロンや香水・口紅をつける	533	2.70	1.31	533	2.70	1.31	533	2.70	1.31	1 4	-27.44	男性<女性***

*** $p<.001$

Table22 は,シニアの「オシャレ」について尋ねるものである。被服行動へ関心はシニアについてもその精神的健康度に寄与するものであるとの指摘があり(安永ら,2011)今回の結果もその指摘と一致する。被服行動への関心を示す各項目の平均値は高く,取り分けすべての項目で女性が男性を上回っている。

このことから今回の調査対象者は上記の基礎分析の結果が示すように幸福感や IADL も高く経済的にも余裕もあることからメンタルヘルスも良いことが予測されこのことは装いに関心を持つこと循環的作用により一層生活の質 (Quality of Life ; QOL) の維持・増進に寄与していることがうかがえる。

Table23 性行動

質問項目	全体			男性			女性			minmax	t値	性差
	n	mean	SD	n	mean	SD	n	mean	SD			
1.手をつないだり、腕を組んだりする	515	1.39	0.80	515	1.39	0.80	515	1.39	0.80	1 4	-1.74	n.s
2.抱き合う	515	1.26	0.65	515	1.26	0.65	515	1.26	0.65	1 4	-0.09	n.s
3.キスをする	514	1.19	0.55	514	1.19	0.55	514	1.19	0.55	1 4	1.18	n.s
4.性行為をする	516	1.15	0.41	516	1.15	0.41	516	1.15	0.41	1 4	1.00	n.s

Table23 については,シニアの性行動を尋ねる項目である。Carrien et al(2011)は,平均年齢 71 歳男女 1747 人を対象として,性行動の大切さないし親密さの必要について質問をおこなったところ現在は性行動を大切ではない,あるいは自分の性生活が不快だとみなしている人々の認知機能の平均点数は,性は大切で現在の性活動に満足していると感じている人々よりも低かったことを報告している。

しかし、本邦における今回の調査対象者は,他の質問により身体的心理・社会的健康度の高いシニアであるが性行動については算術的平均である 2 点を下回り 1.5 にも満たない低い評定となっている。

近年の我が国における性行動の調査の結果(日本家族計画協会,2013)では、男性では、「勃起障害 (ED) に対する不安がある(23.9%)」と「面倒くさい(41.8%)」、女性では「面倒くさい(44.7%)」と「セックスに際して痛みがある (17.0%)」がその理由として他の年代層より多く回答されていることから、この傾向はシニアになって急激に高まるのではなく、徐々に中年以降徐々に高まることが報告されていることから安心して触れ合える関係性を維持するためにもプレオールドの世代に対する性教育の必要が示唆されよう。

一方で、日本人シャイネスの高さ(Zimbardo,1977)や、匿名の調査ではあるが秘匿性が高い質問項目への回答への抵抗があったことも予測されることから後,性行動について多様な行動を反映した質問項目による調査が必要である。

【参考文献】

- 安永明智・谷口幸一・野口京子(2011)「高齢者における装いへの関心と QOL の関連」文化女子大学紀要. 人文・社会科学 19 pp.63-72
- 荒木 乳根子, 石田 雅巳, 大川 玲子, 金子 和子, 堀口 貞夫, 堀口 雅子, 日本性科学会セクシュアリティ研究会 (編集) (2016)「セックスレス時代の中高年「性」白書」
- Carien Hartmans, Hannie Comijs, Cees Jonker(2011) The Perception of Sexuality in Older Adults and Its Relationship with Cognitive Functioning The American Journal of Geriatric Psychiatry Home March 2015 Volume 23, Issue 3, Pages 243-252
- Cornelius SW, Caspi A. (1987) Everyday problem solving in adulthood and old age. Psychology and Aging.;2:144-153.
- 法務省(平成 27 年,2015)平成 27 年における「人権侵犯事件」の状況について (概要)
- 古谷野亘, 柴田博, 中里克治, 芳賀博ほか: 地域老人における活動能力の測定; 老研式活動能力指標の開発. 日本公衆衛生雑誌, 34: 109-114 (1987).
- 楯本知子 (2007) 対人関係におけるユーモアと自己表現—日本人のユーモアコーピング—総合人間科学, 7, pp.11-19.
- 楯本知子・山崎勝之 (2010). 対人ストレスユーモア対処尺度 (HC I S S) の作成と信頼性,妥当性の検討 パーソナリティ研究,18,96-104
- 小塩真司(1998)自己愛傾向に関する一研究 —性役割観との関連— 名古屋大学教育学部紀要 (心理学) , 45, 45-53.
- 村山陽(2009)「高齢者との交流が子どもに及ぼす影響」『社会心理学研究』 第 25 巻第 1 号
内閣府 高齢者の健康に関する意識調査 (平成 24 年)
日本家族計画協会 ジャパンセックスサーベイ 2013 年版
- 太田仁・阿部晋吾 (2016)「シニアのコミュニティジョイニングとエナクトメント 同居家族人数によるシニアの援助要請態度の差異」2016 年日本家族心理学会・日本交流分析学会合同総会発表論文集
- 太田 仁・阿部晋吾(2012) 「援助要請態度と援助者の探索過程」援助要請態度における関係志向性 日本心理学会第 76 回大会 発表論文集
- 關戸啓子(2006)「全国の幼稚園・保育所における幼児と高齢者のふれあいに関する実態調査」『川崎医療福祉学会誌』 Vol. 15 No.2
平成 25 年版 情報通信白書 第 3 節 超高齢社会における ICT 活用の在り方 2 超高齢社会における新たな潮流
- Sawrie, S.M., Watson, P.J. & Biderman, M.D. (1991) . Aggression, sex role measures, and Kohut's psychology of the self. Sex Roles, 25 (314) , 141-161.
- 鈴木 隆雄・權 珍嬉「日本人高齢者における身体機能の縦断的・横断的变化に関する研究」(第 53 巻第 4 号「厚生指標」平成 18 年 4 月, p1-10)
- Zimbardo, P. G. (1977) Shyness: What it is, what to do about it, Massachusetts: Addison-Wesley.木村駿・小川和彦(訳) 1982 シャイネス I 内 気な人々, II 内気を克服するために 勁草書房